

令和元年6月7日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04214

研究課題名(和文)ドクロリー・メソッドによるカリキュラム開発と教師の能力形成に関する比較的研究

研究課題名(英文) A Comparative Historical Analysis of the Teacher's Growth through the Curriculum Development related to the Decroly Method

研究代表者

橋本 美保 (HASHIMOTO, Miho)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：60222212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代日本の教師がドクロリー・メソッド研究を通してプロジェクト型カリキュラムの開発や実践に関わった契機や、能力形成のプロセスを米国の教師と比較し、日本の教師の力量形成過程の特質を考察した。まず、ドクロリー・メソッドの理論的背景とその実践的特質を把握し、1920年代に日本とアメリカにもたらされた情報が、当時の教師たちに伝わった過程を明らかにした。日米の新教育学校におけるドクロリー・メソッドの受容事例を比較した結果、日本の教師は組織的な研究態勢を維持し難い状況にあったが、優れた実践家は、実験的な試行ができる環境を自ら組織して協同的なカリキュラム開発に取り組んでいたことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日米の新教育運動期にドクロリー・メソッド導入の過程で教師がカリキュラム開発能力を向上させていた事例に注目し、従来未解明であったドクロリー・メソッドの受容過程やその役割を明らかにした。本研究の成果により、ドクロリー・メソッドによるカリキュラム理論の特質やカリキュラム開発上の課題が明らかになったほか、日本の教師教育の歴史的特性についてそれを形成した外的要因と内的要因を提示した。本研究の成果は、現在の教師教育の場に必要となる条件(環境)整備と、現職教育の研修時における省察プログラムの開発に歴史的示唆を与え得る。

研究成果の概要(英文)：This study aims at clarifying the historical characteristics of the modern Japanese teachers' growing process by comparing their experiences of studying and implementing the Decroly Method in elementary schools with those of the American teachers of the same period. At first, the study described the theoretical background and the practical characters of the Decroly Method, and then investigated on how such kind of method was introduced and was developed both in Japan and America after the information was brought in the 1920s. After the comparison between the efforts done in both countries, it became clear that though Japanese teachers had difficulties in maintaining systematical research, outstanding practitioners could organize environments for experimental practices, to develop curriculum in a collaborative way.

研究分野：教育史、カリキュラム史

キーワード：ドクロリー 教師の成長 進歩主義教育 大正新教育 プロジェクト カリキュラム

## 1. 研究開始当初の背景

日本へのプロジェクト型カリキュラムの導入に関しての歴史的な研究は、従来ほとんど行われてこなかった。しかし、近年、遠座知恵(『近代日本におけるプロジェクト・メソッドの受容』風間書房、2010)によって、当時の教育界におけるプロジェクト・メソッドの受容過程が明らかにされ、その受容がキルパトリック(Kilpatrick, W.H.)の学習理論に対する本格的な研究や理解によるものではなく、アメリカのさまざまな研究者による評論や方法の翻訳・紹介にとどまっていたことが指摘された。しかし、当時の欧米の学習理論がなぜ日本では理解されなかったのか、実践レベルで普及しなかったのか、についてはほとんど解明されていない。

研究代表者はカリキュラムの歴史的研究を専門とし、これまでに大正期におけるカリキュラム論の受容とその実践の特質について研究を進めてきた。そこでは、新教育と呼ばれる児童中心主義教育の実現のために、合科学習やプロジェクト・メソッド、生活单元など従来の教材单元を再編する経験单元が創出されていたが、それらはアメリカのプロジェクト理論だけではなく、ヨーロッパのカリキュラム理論、特に「ベルギーのプロジェクト」と呼ばれた「ドクロリー・メソッド」が現場の教師達に少なからず影響を与えていたことを明らかにした。さらに、アメリカのプロジェクト・メソッドもまたドクロリーの「興味の中心」理論をその核として形成されていた事を指摘した。日米の新教育運動の中で普及したプロジェクト型カリキュラムは、いずれもベルギーの教育学者オヴィッド・ドクロリー(Ovide Decroly, 1871-1932)が提唱した「興味の中心」理論の影響を受けており、それは第二次世界大戦後の新教育を経て現在に至るまで、欧米のカリキュラム改造運動に影響を与えている。特に、日本においては、ドクロリー・メソッドの情報はアメリカからだけではなくフランスやイギリスからも受容されており、そのことによる実践上の特質も生じていたと考えられる。

これらの史実を考証する過程で研究代表者は、日本に受容されたドクロリーのカリキュラム理論に注目し、それが現場への適用を志す教師たちにどのように伝わり、どのような態勢のもとで研究されて具現化していったのか、その具現化を試行し模索する過程にそれを促進する、あるいは阻害するどのような要因が存在したのかを解明するために、教師の側に焦点をあててアメリカの場合と比較研究することが有効であると考えに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、主として大正新教育期において、ドクロリー・メソッドの影響を受けたプロジェクト型カリキュラムの開発と実践の具体相を明らかにし、それに関わった教師たちのカリキュラム・デザイン能力とその形成過程の特質を明らかにすることを目的とした。戦前の日本におけるドクロリー教育情報の普及状況を把握した上で、プロジェクト型カリキュラムの開発に取り組んだ実践校に着目して、その研究態勢や教師たちの意識変容の過程を明らかにした。同時期にプロジェクト型カリキュラムによる実践改革に取り組んだアメリカの事例と比較することによって、なぜ日本においてはこれまで教師がカリキュラム開発をすることが困難であったのか、日本の社会制度や文化に関わる外的な要因や教師自身の内的な問題について考察した。

## 3. 研究の方法

本研究では、まず、ドクロリー・メソッドによるカリキュラム理論、およびフランスやアメリカを経て普及したカリキュラム開発実態に関する情報内容や受容経路について調査した。次に、その影響を受けて実践された歴史的な事例の中から、大正新教育期に活躍した教師や実践を取り上げ、彼らの実践記録や自伝、回想録、インタビュー記録などにより、ドクロリー・メソッドによるカリキュラム開発の契機やプロセスなどの実態を明らかにしつつ、次の点について分析を行った。

- (1) 国際的な新教育運動におけるドクロリーやドクロリー・メソッドの位置  
ドクロリー自身の思想およびドクロリー学校におけるその実践の特質  
ドクロリー教育情報が欧米や日本に普及していった契機や経路
- (2) 実践者によるドクロリーの教育思想やドクロリー・メソッドの理解  
ドクロリーの教育思想や実践情報が教育現場に紹介された経緯  
現場の実践者たちによるドクロリー・メソッドの研究態勢
- (3) 日本の教師のカリキュラム・デザイン能力形成過程の特質  
ドクロリー教育情報に基づくカリキュラム開発の実態  
日米の事例比較によるカリキュラム・デザイン能力形成過程の特質

## 4. 研究成果

ドクロリー・メソッドによるカリキュラム開発の実態とその普及状況に関する以下の資料調査を行い、ドクロリーの理論と実践に関する情報がどのように生成、普及、受容されていったのかを明らかにしつつ、受容主体である教師の能力形成の視点から、そのプロセスを実証的に明らかにした。

- (1) ドクロリーの教育思想およびドクロリー学校におけるカリキュラム理論とその開発過程に関する先行研究の検討、および開発に関わった教師に関する資料調査  
 ドクロリーが依拠する発生心理学やゲシュタルト心理学に関する「興味」研究の特徴と、ドクロリー教育思想の形成過程に関する心理学史や教育運動史における先行研究の動向  
 ベルギーのエルミタージュ校をはじめヨーロッパを中心に世界各地に普及したドクロリー学校におけるカリキュラム理論とその実践。特に、ドクロリー・メソッドを広く紹介したエルミタージュ校の校長アメリー・アマイドによるカリキュラム実践とその普及活動  
 日米で受容されたドクロリー教育情報の発信元である世界新教育協会の機関誌『新世紀 (The New Era)』やフランスの教育雑誌などのメディアが果たした役割  
 コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの実験学校リンカーン・スクール、およびイリノイ州ウィネトカ公立学校の教師たちによるプロジェクト型カリキュラムの開発過程とその実践
- (2) 日本においてドクロリー・メソッドの影響を受けたプロジェクト型カリキュラム開発の実態調査  
 以下3つの師範学校附属小学校におけるプロジェクト型カリキュラム開発の実態と中心的役割を果たした教師
- ・東京女子高等師範学校附属小学校（北沢種一、坂本豊）
  - ・奈良女子高等師範学校附属小学校（木下竹次、鶴居滋一）
  - ・明石女子師範学校附属小学校（及川平治、西口槌太郎）
- 私立学校である児童の村小学校と成城小学校におけるプロジェクト型カリキュラム開発の実態と中心的役割を果たした教師（志垣寛、野村芳兵衛、島田正蔵）  
 公立小学校である東京市富士尋常小学校における低学年教育のカリキュラム開発の実態と中心的役割を果たした教師（上沼久之丞、奈良靖規、谷岡市太郎）

上記の調査結果をもとに、ドクロリー・メソッドによるカリキュラム理論の成立過程、および国際的に普及したカリキュラム開発情報と日本におけるその受容に関して、以下の新知見を提示した。

これまでドクロリー・メソッドが日本に紹介されたのは1925年頃からであると言われてきたが、その経緯やその後の普及のプロセスを扱った基礎的研究は行われていない。本研究では、まず、ドクロリー教育情報に関する教育ジャーナリズムの反応を調査した結果、日本におけるドクロリー教育法の研究は1922年頃開始されていたこと、その背景には、アメリカに先駆けて学校改造に取り組んでいたヨーロッパの新教育運動に対する旺盛な関心があったことが明らかとなった。教育ジャーナリズムにおけるドクロリー・メソッドに対する関心は1925年が最も高く、1935年まで継続されており、1920年代には実践家が多く、1930年代には理論家が多く記事を寄せていた。近代日本に普及したドクロリー教育情報の特色は、その多くが外国文献からの翻訳であり、内容がほとんど同じものだったことである。典拠とされた情報源は、ドクロリー学校の教師であったアマイド(Amélie Hamaïde)の著作や発言であることが多かった。また、ドクロリー・メソッドについての実践報告やそれに基づく批判は全くみられず、ダルトン・プランやプロジェクト・メソッドのような流行現象にはならなかったことを指摘した。

次に、ドクロリー・メソッドの研究によってプロジェクト型カリキュラムの開発を行っていた事例として、東京女子高等師範学校附属小学校、明石女子師範学校附属小学校、成城小学校、富士尋常小学校の4校のカリキュラム開発過程を比較した。いずれの事例にも、実践改革を主導した主事や校長に強力なリーダーシップが備わっていたこと、実践改革を志向した教師たちが主体的共同的に研究を行っていたことを指摘し得た。ただし、主導者を含めた教職員の成長のプロセスは事例毎に異なっており、それぞれの方法で「教師の成長を支える学校経営」が行われていた。

さらに、こうした取り組みを、同時期のアメリカの著名な学校改革の事例であるリンカーン・スクールやウィネトカ・プランのカリキュラム開発過程と比較した。日米の教師たちは、いずれの事例においてもプロジェクト型カリキュラムの開発に取り組む中で、試行錯誤を繰り返して経験的に力量を形成していた。注目すべきことは、ドクロリー・メソッドがダルトン・プランやプロジェクト・メソッド等とは違って容易に模倣できるカリキュラムモデルでは無かったために、何れの事例の教師たちもその原理を理解しようと主体的に研究していたことである。大きな相違点は、教師の実践課題に対する問題解決的な研究の機会や環境の与えられ方であった。アメリカの事例では、そのような機会や環境を与える制度が早くから多様に用意されていたのに比べて、日本の場合は、教師の教育内容編成に関する裁量が制限されがちであり、その能力開発を支援する環境が整備されるのが遅かった。しかし、日本の教師達は制度の枠外で実践的能力を開発する意識が強く、優れた実践家たちは彼らの実践哲学をそれぞれの教員生活の場において自己研修の形で形成していたと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

- (1) Miho Hashimoto, Hisashi Miyano. "Circulation of Knowledge on Progressive Education in Modern Japan," Education and Nature: International Standing Conference for the History of Education 40, Book of Abstracts, 2018, p.74. (査読有り)
- (2) 橋本美保・江口潔・遠座知恵・宮野尚「思想史と実践史を架橋する—新教育研究への提案—」『近代教育フォーラム』第 27 号、2018 年、111-117 頁。(査読有り)
- (3) 宮野尚・橋本美保「近代日本におけるウィネトカ・プラン情報の普及—国際新教育運動における情報交流の一断面—」『東京学芸大学紀要』総合教育科学系、第 69 集、2018 年、15-31 頁。(査読無し)  
http://hdl.handle.net/2309/148849
- (4) 橋本美保「上沼久之丞によるドクロリー教育法の紹介—大正新教育期公立小学校長のリーダーシップ—」『東京学芸大学紀要』総合教育科学系、第 69 集、2018 年、1-14 頁。(査読無し)  
http://hdl.handle.net/2309/148848
- (5) 橋本美保「近代日本におけるドクロリー教育情報の普及—国際新教育運動と大正新教育—」『東京学芸大学紀要』総合教育科学系、第 68 集、2017 年、9-23 頁。(査読無し)  
http://hdl.handle.net/2309/146931
- (6) 宮野尚・橋本美保「C.W.ウォッシュバーンにおける集団的創造的活動の思想形成—ヨーロッパ新教育の影響を中心に—」『東京学芸大学紀要』総合教育科学系、第 68 集、2017 年、25-35 頁。(査読無し)  
http://hdl.handle.net/2309/146932
- (7) 橋本美保「実際の理論化—看過されてきた実践思想—」『近代教育フォーラム』教育思想史学会、第 25 巻、2016 年、27-30 頁。(査読有り)  
DOI : 10.20552/hets.25.0\_27

〔学会発表〕(計 5 件)

- (1) Miho Hashimoto, Hisashi Miyano. "Circulation of Knowledge on Progressive Education in Modern Japan," Education and Nature: International Standing Conference for the History of Education 40, Berlin, 2018.
- (2) 橋本美保「教師の成長を促す学校経営—大正新教育における二校の実践改革を比較して—」国際教育フォーラム 2018 (世界新教育学会)、神戸大学、2018 年。
- (3) 橋本美保・江口潔・遠座知恵・宮野尚「思想史と実践史を架橋する—新教育研究への提案—」教育思想史学会第 27 回大会、武庫川女子大学、2017 年。
- (4) 橋本美保「東京市富士小学校におけるカリキュラム開発の態勢—大正新教育期の公立小学校における教師の協同—」日本カリキュラム学会第 27 回大会、香川大学、2016 年。
- (5) 橋本美保「東京市富士小学校におけるドクロリー教育法の受容—1920 年代の奈良靖規の実践を中心に—」日本カリキュラム学会第 26 回、昭和女子大学、2015 年。

〔図書〕(計 3 件)

- (1) 橋本美保編著『大正新教育の受容史』東信堂、2018 年、全 336 頁、3-12、61-91、267-322 頁。
- (2) 橋本美保監修『文献資料集成 大正新教育』第 1 期～第 2 期(全 20 巻)、日本図書センター、2016 年～2017 年、全 9050 頁。橋本美保「解説」、第 20 巻、2017 年、314-346 頁。
- (3) 橋本美保・田中智志編著『大正新教育の思想—生命の躍動』東信堂、2015 年、全 566 頁、3-31、164-231、551-552 頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし